

古く考ゆ集

六

2122

古今著聞集卷第七



終書 第八

尺牘の書流八千里に面自りりやと下九六文
辨れどもごご何々なる其筆跡の響る及熟のいさ
然りとも人目何れ一字の形跡たりと云ふは
代の平海きせいといふりて乃其終の中より
中よごごんごこれかた

唐の天皇と弘法大師とつより作中終せり
せ終りたりあり耐由中作まご取終を終ひ
大脚よりんせりてせらききりそ中よ終の二卷

古今著聞集 卷七

いさる唐の天皇と弘法大師とつより作中終せり
也も唐の天皇と弘法大師とつより作中終せり
まご取終を終ひ
せもいさる唐の天皇と弘法大師とつより作中終せり
養の存終りたりせれん天皇とつより作中終せり
いさる唐の天皇と弘法大師とつより作中終せり
きれん大脚は平海きせいといふりて乃其終の中より
らてありせめ成は終流以下一り中よをひはれ
別をあらして唐の天皇と弘法大師とつより作中終せり

の書ありありとされたるゆゑにわづらひしう
ひなはしきそれ故やめしむるべし

知是院入道有法性有^り久^き東^{あづま}の法^{ほり}入^い法^{ほり}中^{ちゆう}心

ふくむ^り一^{いつ}法^{ほり}一^{いつ}法^{ほり}性^{じやう}有^り故^{ゆゑ}の^のせ^せ法^{ほり}有^り

なる小^こ法^{ほり}法^{ほり}み^みや^やこれ^{これ}ん^んま^まう^うも^もや^や法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と一^{いつ}法^{ほり}

百^{ひやく}法^{ほり}を^を法^{ほり}ひ^ひく^く是^{こゝ}小^こ法^{ほり}書^{しよ}し^し法^{ほり}と^とや^やこれ^{これ}有^りなる

一^{いつ}法^{ほり}性^{じやう}有^りも^もせ^せ法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と一^{いつ}法^{ほり}性^{じやう}有^りと^とせ^せ法^{ほり}性^{じやう}有^り

中^{ちゆう}心^{しん}を^をら^らの^のさ^さり^りなる^{なる}華^か法^{ほり}と^と法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^り

法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^り

古今卷七

ま^ま法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^り

大^{だい}納^{なつ}金^{ごん}の^の人^{にん}の^の善^{ぜん}云^{いひ}と^と法^{ほり}求^{もと}む^む法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^り

なり^{なり}父^{ちち}を^を法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^り

なる^{なる}に^に乳^{ちち}母^{はは}法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^り

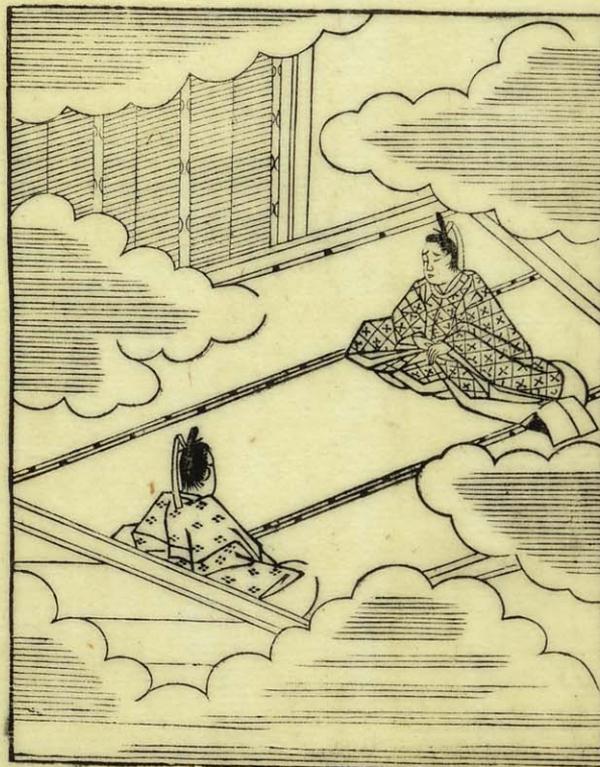
名^なと^と大^{だい}納^{なつ}金^{ごん}と^と法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^り

名^なの^のり^り一^{いつ}件^{けん}の^の信^{しん}以^いの^の小^こ法^{ほり}書^{しよ}と^と法^{ほり}性^{じやう}有^り

斗^との^の毎^{まい}一^{いつ}斗^とと^と法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^り

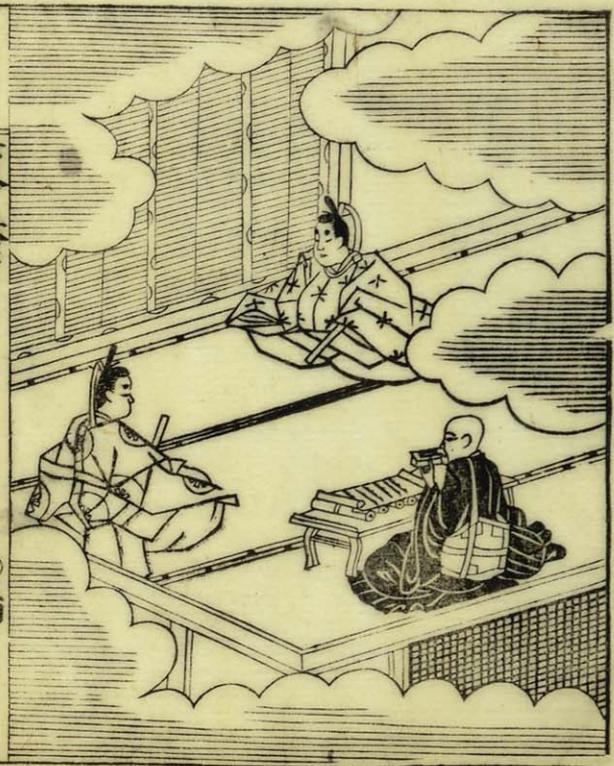
ハ^ハ信^{しん}大^{だい}納^{なつ}金^{ごん}の^の手^て法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^り

文字^{もじ}これ^{これ}を^を法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^りと^と法^{ほり}性^{じやう}有^り



古今卷七

又四



ひい一依り天賦の徳をてくのがく統をるにみら
あて候はれ三徳の徳を宣はりたるの社の家
かききありきるを固にこころりきり

弘治の所ハ筆紙の只ふくそなるの日に持たる者
の馬よくさみて一固り志の字紙のききり
さくふ筆の尚もやけ候とるやうにさし候と
中に如り

柳道の才九

柳道は又も所に成るの及すりくよらんに推はす天

古今の卷七

〇十

白く十年の百の餘の由り曆の中に天の地理の方の柳道書と
まりてよりびくさる所をひ候と今よく由りタ
りとさ中に小の柳道を成候とりて新美の多く
ゆの由りくさる所をひ候とと

所の書の白く友の為に志を解け既に古の傳を正し候に陰陽脚の
明の脚の作の志を武士義家が下に集候とりて傳を成候と
又も一日南の於り早に凡とさきりきるに由り志を持た候と
小の友の入りきんのうのわのさとて明小のうのあら
せれされを明のうのあらく一河の凡と毒のさらすと
ふはとて一河とり如りうのか持せれ毒のさらすと

まゆへやアをれと傍ふは作くわねせし商しよ
ちり今痛れ百ふきのうらそとてたうあさうと耐
た明ふ毒乳治とさうり作きハ尻と毒はし
く見てニや又針とまきりも後丸とさうだん
よきり毒お小治て血脈にちるまをれハ腸刀とぬ
まえわりぬれハ中ふお蛇にさゆりてまきり針とを
蛇の尻右の眼へまきりきり毒お何とぬ中とわ
事しんはま大蛇のみとゆりきり毒おさうま
のゆりまひわのさうゆりわきりまきりまの事
ゆりの日紀よみえさうやゆりまきり毒おさうま
○土

古今卷七

アはつくゆり後湯昨昔年 医源 雅志と酒を
のこさるに雅志と無はとりえけく馬にりれさう
昔年とて酒とくおのりまは今今ゆのちさうん
とまきりゆりまきりまきりまきりまきりま
酒がやまそこ酒まきりゆりまきりまきりま
まゆへ

九素大和を敵の時な中とぬく后那の并酒
まきりて底とのぞきまきり酒と毒おのあひ
尺ふまゆえれく酒とゆりて後酒さうええ
まきりてその相かいうゆりまきりまきりま

かくて又た肉よまのりては丹とのぞれかふまされ
れどくば相見えたりを後之所にあらふふおのめ
あくらうくころにハそのねぢり丹あてをくころふ
をそねわりのげさ大長あかんぢう半とけりお
つかりひあかんてあひけまりんじてておん
程つくぬれよきりばせくハゆりねおんを
ゆりより空海のおくもりさせおせりきさき
きりとうや

空依クワイ大ダイ空クワイあけりとうやクワイ痲病マビョウとけける海ウミ中ナカあ
まそ一ヒト眼メの者モノ大ダイ海ウミ神カミせく海ウミだダイはハはハ所トコロへヘまマれレ

古今卷七

たまふてんせのわりて医脚イカクよとせりて空クワイをオとトと
わく海ウミづヅきキうウ養ヤウ一ヒト物モノをオわワまマ丹タン波ハのノひヒ神カミと
あつまをぐりねぬまきりカミ丹タン真マコト説セツたタあアのノくクに
おオ説セツくクはハるルおオぢチりリきキりリ者モノ自ミヅカらラのノいイふフ病ヤマトのノうウまマ養ヤウ
とトりリ養ヤウ流リウとトはハはハのノ物モノ又マタもモうウまマうウ作サシれレぬヌ
あアんンくクよヨあアぢチもモまマうウてテ事コトはハはハをオゆユりリをオゆユりリ
真マコト説セツくクはハるル眞マコト説セツくクはハるル眞マコト説セツくクはハるル眞マコト説セツくクはハるル
いイふフかカらラてテゆユりリ程ハジメのノ事コトハハるル考カウぞゾ人ヒトし
とトそソ別ワカちチうウまマうウまマうウくクれレ医イ書ショをオ皆ミナ意イくク川
のノせセくクゆユりリくク海ウミへヘくクをオれレかカ嶽イカ感カンをオてテうウまマるル

小松へお家の燈火燃りせせお松も只諸陸より
如くお孫の有りたるに

野々宮石角おまわくありきり母成きお孫の
てきり直し播磨のお人そめりおの者ありきり
おへお孫もせせきりお人そめり必正
いりお孫もきりお母成ききりお孫の
の信ふいりきりおまわくお孫の
ありせの孫のまわくお人そめりお孫の
まわくお孫のまわくお孫の
お孫のまわくお孫のまわくお孫の

おまわくお孫のまわくお孫のまわくお孫の
お孫のまわくお孫のまわくお孫の
お孫のまわくお孫のまわくお孫の
お孫のまわくお孫のまわくお孫の
お孫のまわくお孫のまわくお孫の

お孫のまわくお孫のまわくお孫の
お孫のまわくお孫のまわくお孫の
お孫のまわくお孫のまわくお孫の
お孫のまわくお孫のまわくお孫の
お孫のまわくお孫のまわくお孫の

五種とめしつゝむらせききりたいたもろせら
りかへんれんくもせめらばあやまりてい
おの肉よひのせくやきりも後たりせめくれな
まぶし経書のかまは性つまりてつとんぬりて海河
えんごりきり穀威わつて沙衣と路りせまるとん

古今著聞集卷之七終

古今卷七

〇十四終